

# UNEP 国際環境技術センターの思い出

井手 慎司

環境政策・計画学科

## 1. はじめに

通算 2025 日 (約 5.5 年)、訪れた国 27 ヶ国。これが今回、「国際」というテーマを与えられたことから、過去の手帳などをひっくり返して計算してみた、私の「国際」に関する経歴である。通算の内訳は、米国での留学が 4.5 年、海外出張が 10 ヶ月、国内での英語による講義が 2 ヶ月となる。「国際」はもともと「国家間の交際」という意味で造られた和製漢語なのだそうで、個人的な留学を「国際」に含めることに躊躇はあるが、留学がその後の、私が「国際」と関わるきっかけとなったことは間違いないので含めることにした。ただし、国内での国際会議や海外からの訪問者への対応などの細々としたものは計算に加えていない。

これを長いとするか、短いとするか……今年で 55 歳なので、人生の 10 分の 1 の長さである。決して短くはないな、というのが改めての感想である。

今回の特集は「国際」であればなんでもよいということなので、以下、これまで書いたことがなかった国連環境計画 (UNEP) 国際環境技術センターの誘致に携わった思い出を中心に、留学時代から県立大学に着任する前までの「国際」に関する自分史を書き記しておきたい。

## 2. 留学時代と帰国後

大学院を修了後、1982 年の 12 月に渡米し、テキサス州ヒューストンの Rice 大学 (博士過程) に入学した。留学しようと思いついたのは、英語が大の苦手だったからだ。嫌いだったと云ってもいい。米国で暮らせば、いやでも英語が身につくだろうと考え、留学を決意した。いまから 30 年も前の、1 ドルがまだ 250 円くらいだったころの話である。

当時は、さまざまな分野においてなお米国が世界を牽引していた。経済的にもやはり豊かな国であった。レーガン大統領の下、再び強い米国を指向していた時代でもあった。南部の、日本ではあまり知名度の高くない大学であったにもかかわらず、私以外にも日本からの留学生が何人もいた。いまから考えれば、私を含めた多くの日本人の中に、米国への漠とした憧れや、あるいは「国際化=良いこと」といった素朴な信仰が残っていた最後の時代だったかもしれない。

約 4 年半の留学を終え、87 年 7 月に帰国すると (株) 明電舎の東京の研究所に勤めることになった。留学に

あたって、同社から奨学金をもらっていたための、お礼奉公である。8 月から働きはじめたが、10 月には結婚している。入社した初日に、上司に結婚式への出席をお願いして、驚かれた (呆れられた?) ことを覚えている。

結果として明電舎は約 3.5 年で辞めることになるが、勤めていた間は「国際」とはまったく無縁の生活だった。バンコクの国際会議で発表する機会があったが、直前にインフルエンザに罹ってしまい断念、一度も海外にでることはなかった。

転職が訪れたのは 90 年の 8 月である。大学時代の恩師から、滋賀県が人を探しているの、行ってみないかという電話があった。実はそのころ、同じ恩師の紹介で、某大学に移る話があったが、土壇場で実現せず、どうせ一旦、会社を辞めるつもりになったのなら、という誘いだっただ。

仕事の内容は、滋賀県が UNEP のセンターを誘致しようとしていたので、そのために働くというもの。国連に関わる仕事ということで興味がわいたのかもしれない。引き受けることを即答したように記憶している。

まだバブルも弾けておらず、不安定で給料が半分近くに減るかもしれない転職であった。それなのに、家内がよく賛成してくれたものだと思う。会社も最終的には快く送り出してくれた。というより、二年ほどは、出向の形で、会社から給料をもらいながら滋賀県で働くことになる。

## 3. 国際湖沼環境委員会への着任

滋賀県には 1990 年の 12 月に着任した。身分は県の外郭団体である (財) 国際湖沼環境委員会 (ILEC) の事務局職員というもの。その上で、県庁内に設置された UNEP センターの施設開設準備室の嘱託員を兼務することになった。室長は、センター誘致のために環境庁から県に出向してきていた森谷賢さんだった。

たまたま翌 91 年から ILEC による JICA の湖沼水質保全研修が始まっている。研修の中でいくつかのコマの講師を務めることになった。最初は湖沼モデルやデータ解析に関する講義の担当だったが、途中からは、データ解析に替わって、住民参加を担当することになる。同研修は、名称こそ途中で湖沼流域管理へと変わったが、現在まで続いており、この 2 月と 3 月にも 23 年目の講師を務めたところであ

る。ILEC の JICA 研修としては 2000 年から 12 年までの間、環境教育のためのコースも開講されており、うち 9 年間はこちらのコースでも年に 1 回の講師を務めている。

私が ILEC に勤め始めたころは“国際協力”、特に途上国に対する支援が盛んに強調された時代であった。上記の JICA 研修も、わが国の ODA 対象国から毎年 10 人前後の研修生を集めて開かれるものであったし、滋賀県が誘致しようとしていた UNEP のセンターにしても、国連機関であるから、基本的に途上国支援を目的としていた。ILEC そのものも、1984 年に大津で開かれた第 1 回世界湖沼会議の基調講演において、当時の UNEP のトルバ事務局長が提案したことを受けて、世界の湖沼環境を保全するための国際的な機関として設置されたものであった。

#### 4. UNEP 管理理事会

前述したように、私が滋賀県にきたのは、県が UNEP のセンターを誘致しようとしていたからである。そのため、UNEP の本部があったケニアのナイロビには何度も往復した。まだ中東経由の南周りのルートが不便な時代である。ナイロビには主にパリを経由して入っていた。

ナイロビ出張で最も印象に残っているのが 1991 年 5 月の第 16 回 UNEP 管理理事会である。この理事会において、国際環境技術センター (IETC) を日本 (滋賀と大阪) に設置することが決議されている。管理理事会の初日、まだ着任したばかりで右も左もわからない私に与えられた仕事は、会場の通訳ブースの一つに潜り込むことだった。

国連には公用語が 6 つある。英語、ロシア語、中国語、フランス語、アラビア語、スペイン語である。そのため、国連の公式会議では必ず、これら 6 ヶ国語の同時通訳が提供される。理屈の上では、 $6 \times 5 \div 2$  で 15 人の通訳者が必要だが、国連で働く通訳者はほぼ間違いなく 3 ヶ国語以上話せるので、4 人から 5 人のチームで通訳にあたる。そんな通訳者の中の 1 人のブースに、警備の目をかい潜って入り込み、あることを通訳者に頼んでやってもらわなければならなかった。

それは、センターの滋賀県への設置を歓迎する副知事の演説を英語に通訳してもらうことだった。要は、副知事は英語がまったくダメだったので、日本語で演説してもらい、それにシンクロさせながら、予め英訳していた原稿を通訳者に読みあげてもらわなければならなかったのだ。原稿は森谷賢さんが英訳した。

湾岸戦争の余韻が残っていた時期である。短機関銃を携帯した警備兵があちこちに立っていたが、幸い

捕まることもなく、何とかブースの 1 つに潜り込んだ。怪訝な顔をされたが、なんとか通訳の女性を説得することにも成功し、無事役割を果たすことができた。あとから考えると無茶な話である。国連の公式会議で日本語で演説することも掟 (おきて) 破りなら、通訳者のブースに忍び込んで英語に通訳してもらうことも、そもそも、そんなことを指示するほうもほうである。

当時、UNEP に環境庁から出向していた平石尹彦さんが後年、言っていたが「あのとき、管理理事会で副知事がいきなり日本語で話し始めたのにはびっくりした。慌てて同時通訳のレシーバーのチャンネルを回してみたら、英語のチャンネルからちゃんと通訳された英語が聞こえてきたので、そういう仕掛だったのかと合点して、苦笑いした」そうだ。

もう時効だから話していいだろう。管理理事会の会場の外では、外務省と環境庁の担当者が手分けして、センター設置への賛成票を獲得するための裏工作に奔走していた。というのも、IETC の設置は、途上国に対する日本の環境技術の売り込み窓口になるのではないかという懸念の声が先進国の特にカナダやフランスから挙がっていたからだ。ともあれ、アフリカ諸国を中心に行った多数派工作に成功して、前述のように、この管理理事会において IETC を日本に設置することが決まった。ただし、誘致に滋賀県と大阪府市が同時に手をあげていたことから、政治的決着として、1 センターでありながら滋賀と大阪に 2 つの事務所をもつという歪な形で IETC はスタートすることになる。そのことが、あと後まで禍根を残すことになるのだが……とはいえ、1 センター 1 事務所であれば、滋賀県は確実に大阪府市に負けて、誘致に失敗していただろう。

#### 5. 国連環境計画国際環境技術センターの業務開始

UNEP センターの設置の大義名目は“国際協力”あるいは日本や滋賀県の国際貢献というものであった。しかし、上記の管理理事会での決議以降、私が主に手掛けたのは、IETC の特に滋賀事務所としての機能をどのようなものにするか、湖沼環境を中心テーマとしたい滋賀県と国内外の関係機関との思惑との調整を図る“渉外担当”とでもいうべき仕事だった。そのため、ILEC にいた間に出張した回数は、カナダのトロントや国連機関が集積しているジュネーブへのほうがナイロビより多かったくらいである。考えてみると変な話である。UNEP のセンターの機能をどうするか、国連でもない、誘致した国の、それも地方自治体がなんとかしようと躍起になっていたのだから。

もし私が滋賀県にきたことが、少しでも役に立ったとしたら、IETC の滋賀事務所が、県の希望通り、国

際的な湖沼環境の管理を主要なミッションとしてスタートした点だろうか。これについては最後まで危ない綱渡りが続いた。日本に設置される IETC のもう一つの大阪事務所のミッションが大都市の環境管理となっていたのだが、実は UNEP 内部では、IETC としてはそちらに特化すべきであり、湖沼については、大都市圏の水源地のひとつとでも位置づけておけばよいとの考えが一部に根強かったのである。もちろんこの考えにも一理あるが、IETC を県内に誘致し、烏丸半島に専用施設まで建設中であった(琵琶湖を抱える)滋賀県にとって、県民や議会への説明のためにも、湖沼環境の管理をセンターの機能として外すわけにはいかなかったのである。

IETC の滋賀事務所は 1994 年に仮事務所で業務を開始したが、その間に、上記のような“湖沼外し”の動きが UNEP 内部にあることを私に内々にリークしてくれた協力者がいた。そのため、そのことに対して強い懸念を示す副知事書簡をトルバ事務局長あてに送ることで、その動きを牽制した。書簡は私が起草した。それによって“湖沼外し”を水際で阻止することができたのである。ただし、結果としてみたとき、IETC の滋賀事務所は数年後に、そのミッションから湖沼の環境管理を外すことになる。さらに、かなり後のことにはなるが、2011 年には閉鎖され、結局、大阪事務所に統合されている。

IETC の滋賀事務所が業務を開始した翌年、95 年の開学と同時に、私は県立大学に移ることになった。それとともに、私にとっての“国際”も大きく変わっていく。後年、天津で開かれた世界水フォーラム(2003 年)のあるセッションで先の平石さんに再会したとき「羨ましいですね、滋賀県にしっかり根を下ろして。自分のような浮草人生でなく」と言われたのが印象に残っている。

ふり返ってみると、ILEC にいた当時は“国際協力”という、それなりの使命感で働いていたような気がする。しかし、よく考えてみると、根回しや国際交渉の勝ち負けだけに躍起となり、協力の相手も見えない中、実体のない“浮草”のようなことをやっていただけなのかもしれない。そのことに気づくのは、県大に移り、国内外の NGO の人びととおつき合いをするようになってからである。きっかけは 1988 年に南アフリカのセントルシア湖で開催された Living Lakes 会議と 89 年にコペンハーゲンで開かれた第 8 回世界湖沼会議に参加したことだった。これらの会議での出会いによって、私にとっての“国際”は“国際協力”から“国際交流”へと移っていくことになるのだが、それはそれで別の話として、もし機会があれば書くことにしたい。